



2021.2.5

Vol. 63

# 北海道サケ ネットワーク Newsletter

発行 阿部周一  
事務局 高橋壽一 札幌サケ協議会  
〒006-0839  
札幌市手稲区曙9条1丁目10-25  
Tel/Fax: 011-681-4268  
E-Mail: jaytaka@carrot.ocn.ne.jp  
URL: <http://salmon-network.org/>  
編集 寺島一男  
E-Mail: [tera2112@potato.ne.jp](mailto:tera2112@potato.ne.jp)

新型コロナの猛威が一向に収まる様子がありません。長期化を覚悟しなければと思いつつも、毎日に制約が重なる状況の中で暮らしや仕事、社会生活にも大きな影響が出ています。

心からお見舞い申し上げます。  
12月に発行予定だったNLが、諸般に事情ですっかり遅れてしまったこと深くお詫びいたします。

(編集子)



## EVENT NOW

### 人工産卵床の造成と受精卵埋設

「大雪と石狩の自然を守る会」と「あさひかわサケの会」による、サケの人工産卵床の造成と受精卵の埋設が、初冬から暮れにかけて実施されました。

家庭・学校等による水槽での飼育とは別に自然に近い形で稚魚を出発させようと、2005年から継続して実施されています。

造成場所は石狩川本流の比布町と当麻町の境に架かる栄園橋下流右岸で、かつてアイヌの人たちが集落をつくりサケを捕獲していた突峭山産卵場に該当します。

上川盆地の石狩川水系では往事と比べると、都市化の進展や河川改修等様々な要因が重なって地下水位が低下し、かつての湧水は見られなくなりました。

現在の場所はその中であって、湧水量は少ないものの唯一湧水が継続的に確認できる場所で、年間通して11.5℃(夏季)～4.0℃(冬季)の水温が観測されています。

夏季の増水により河床の状態が変化するため、毎年状況に合わせて産卵床の造成を人力で行い、近年は20000粒の受精卵を埋設しています。



人工産卵床の造成 (2020.11.1)

稚魚の下降時は雪解け水で増水するため、産卵床の稚魚がどの程度に育って下降しているか確認されていませんが、産卵床に設けたモニターケース(300粒)では、ほぼ9割が生残しています。

現在、石狩川上流部の上川盆地では300床前後の野生サケの産卵床が観察されていますが、人工産卵床の設置はその定着に関わって一助になればと行われています。



受精卵の埋設 (2020.12.20)

## 連載

さけア・ラ・カルト (その8)

### お歳暮サケ



12月が近づくとお歳暮商戦が満開。多彩な商品の中でも北海道ではやはりサケが目玉を引く。そんな「お歳暮サケ」にも時代の変遷がある。

戦前には師走の街中を、塩したサケの首に荒縄を通しづら下げて歩く姿を見かけたものだ。ビニールや段ボールがあるわけでもない時代。大抵はしょっぱく塩したサケを首に縄を通し「お歳暮」と書いたのし紙を直接巻いて持ち歩いていた。この「塩したサケ」にも2通りあって、単にドンと塩をした「塩びき」と、1尾1尾を塩してむしろに包み甘塩に仕上げた「あら巻」。お正月には、北海道の多くの家でサケが使われていたようであるが、今なら5千円ぐらいの高級あら巻サケなら、当時では7、8万円に相当していたであろう。我が家でも年越しには焼いたサケが膳を飾っていた。

時には、立派なサケを頂くこともあった。そんな時には子供たちも楽しみにしたものだが、おふくろは「別な

サケを買ってあげるからね」といって、頂いたサケののし紙を張り替え、どこかへ持って行ったこともあった。

戦争が終わり、経済復興の進んだ昭和30年代でもサケは高級品で、川でとれたブナがかったサケでも結構な値段であった。そんな時代に出張したある時、川のサケを土産に頂いた。やがて帰路に就く途中に連絡が入りそのまま他の地域に回るようになった。貴重な土産を捨てるわけにもいかず、それをもって宿に入りお上げすることにした。その夕食時、ご主人が直々に「お礼に」といってお酒つき二膳を運び込み、「宿賃も結構です」と云われた。そんなサケも、ふ化事業の成果が上がり、北海道の資源量もほぼ10倍にもなって値段が下がり「庶民のサケ」と喜ぶ一方、お歳暮前線では肩身の狭い身分となった。

(G)



## SERIES—第5回

### サクラマスとわたしたち サケ増殖技術の発展 1

河村 博

さて次は、旧道立水産孵化場（現在のさけ・ます内水面水産試験場）および旧水産庁さけ・ますふ化場（その後のサケマス資源管理センター、現在の北海道区水産研究所）で取り組まれたサクラマス増殖事業について触れることにいたしますが、その前段として、我が国のサケ（シロザケ）増殖事業発展の基礎をつくり、その技術開発を科学的に支えた旧農林省の別枠予算、遡河性さけ・ますの大量培養技術の開発に関する総合研究、通称「サケ別枠研究」について触れておくことにいたします。

#### サケ別枠研究の背景

##### サケマスの北洋漁業開発

サケ類（北太平洋のサケ属および北大西洋のサルモ属）は古来より、貴重な食料として、また地域文化のシンボルとして、さらに陸域と海域をつなぐ栄養循環の担い手として生物多様性の源となり、地域の人々の精神形成やくらしの柱になってきました。かつての人々にとって、ある時期にまとまって遡上捕獲できたサケ類の保存技術は、来るべき厳しい

冬を乗り越えるために要となるものであり、こうして産み出された工夫が乾燥、塩蔵、燻製でした（鮭の歴史 2014）。

一方、18世紀後半になり画期的な保存技術が開発されました。それが缶詰です。サケ缶はまたたく間に世界規模で拡がり、外貨を得る重要な輸出品目のひとつになり、我が国でも北洋（北太平洋）で漁獲したサケマスを母船で加工するシステム（母船式漁業）を創り上げ、その活動域は沿岸のみならず公海まで拡大していきました。

他方、大戦後の我が国の食料不足は深刻で、その対策が喫緊の課題となり、農業の生産性向上とともに進められたのが、遠洋漁場の再開でした。「獲る漁業」の推進です。

しかし遠洋漁業の拡大は、関係国の軋轢と反発を産み出し、特に1977（S52）年に米ソが発動した「200海里漁業専管水域」により、我が国の遠洋漁業は大打撃を受け、外国の海から次第に撤退する状況に変わりました。こうして遠洋の「獲る漁業」から、これ以降は次第に沿



サケ稚魚 放流サイズ(体長5cm・体重1g)

岸の「つくる漁業」が脚光をあびることになります。

#### サケ別枠研究の背景

##### サケマスの増殖事業

「つくる漁業」の先例として、サケマス増殖事業があげられます。江戸時代にサケの自然産卵を促した「種川の制」に始まり、明治維新後に人工ふ化放流技術を導入した那珂川や千歳川の孵化場整備、さらに第二次大戦後1951（S26）年に議員立法で成立した水産資源保護法により、サケマス増殖事業は国が支える事業に変わりました。

一方大戦後の占領下では、GHQ顧問による増殖事業の視察と勧告が出されました。これにより増殖事業の継続が認められるところになりますが、同時に視察団はサケの自然再生産も視野に入れていたことは注目に値します。

ところで、戦後継続されたサケマス増殖事業はなかなか成果を上げることができませんでした。当時現場で苦勞された事業関係者による創意と工夫の数々は、さけ・ますふ化場広報誌「魚と卵」により知ることができます。

そのなかでは限られた予算と人員で、捕獲親魚、卵と仔稚魚、放流稚魚の飼

育管理や生態学的調査、魚病対策、河川および資源造成に関する調査や模索が、地道に続けられたことが示されています。

これらの結果に基づくサケマス増殖技術の改善は、稚魚の給餌飼育（生餌から配合飼料）、それによる飼育期間の延長と放流稚魚の大型化、さらに標識放流を組み合わせた沿岸環境分析による放流時期の適正化に結び付き、次第に増殖現場に応用されていくこととなります。こうして1970（S45）年代から沿岸に回帰するサケの数が目に見えて増えてきました。後年の研究から、このころの北太平洋の海洋環境がサケマスに適した環境に変化したことも知られています（北洋の環境レージウムシフト）。

我が国のサケ資源の増加を後押ししたのが「サケ別枠研究」であり、「獲る漁業」から「つくる漁業」へのターニングポイントと言えました。

（北海道サケネットワーク顧問  
・元.北海道立水産孵化場長）



標識放流して沿岸に回帰した海産卵由来のサケ成魚  
臀ビレの一部が再生